

18 June, 2010

第10講 文字テキスト（3）：『ウルカギナ碑文』

テキストが伝えようとしているもの・情報を取り出す

だまされた振りをする

ウルカギナの正当性と改革、その実績の強調

第1部 支配者としての正当性

敬虔さの強調

神殿の建設：ニンギルス神やバウ女神に

公共建造物：毛刈小屋、運河、城壁の建設

↓

オリエントの君主の宗教的伝統・自己表現の定型パターン

第2部 即位前の悪弊の横行と権力者の収奪

上司による収奪：船頭係り、羊飼いの長、漁業の係り

神殿領の王領地への編入：

王の行政機構が神官への大麦分配を管掌

王の経済組織への併合（神殿所属の牛、王領地への転換）

神殿領への課税

税負担：羊毛に対する租税負担（銀）

徴税の強制執行：衣服、（ナツメヤシの）樹

各種手数料の徴収

徴税機構

王領地の組織化：王、女王、王子／王女の名を冠した経済組織

↓

即位以前と以後とを峻別するオリエントのパターン

重要な経済体としての王、女王、王子／王女の経済体

労働の組織化を窺わせる

宮殿による再分配機能を示唆

第3部 ウルカギナの治世の実績誇示

改革へのイメージ

支配の正当化：ニンギルス神が選ばれた

ニンギルス神の命令

敬虔さの強調：「彼に語られた言葉を忠実に守った」



一種の神権政治の理念

徴税と差し押さえの禁止

神殿領の返還

手数料の引き下げ

上司のハラスメントを禁止

大赦の執行

弱者保護

公共建造物の建設：運河の建設



善政の施行：一種の弱者保護政策ともとられ世界最初の社会改革と

評価される

少なくとも前代までの悪政を是正したと主張

オリエントにおける定型パターン

テキスト情報の批判

別の情報との比較

『ハンムラビ法典』とか『ベヒストゥン碑文』との比較

「神に選ばれた者」とか「神の言葉を忠実に履行した」というのは

オリエントの定型

社会正義の実施もオリエントの定型

オリエントの君主に求められる支配者像

善政の施行

税の軽減

弱者保護

『ウルカギナの改革碑文』はオリエントの伝統の中に位置づけら

れる

地上における神の正義の「回復」

支配の正当性のプロパガンダの側面

隠されている真実

ウルカギナと前王ルガルアンダとの関係性（継続されるものではない）

ラガシュの都市神：ニンギルス・バウ・ナンシェ

ラガシュの複合的国家構成：ラガシュ・ギルス・ニーナ

王権が神権性を帯びている：神に選ばれる・神の言葉に従う

王室経済が「王の家」「婦人の家」「子供たちの家」と分類

王の役人による運営

神殿経済や個人の独立した経済の存在

職種による労働の組織化（各組織に長の存在、管理機構）

徴税機構の存在（収税吏への言及）

銀での納付が原則

利用者負担による各種手数料の発生

現物（ビールやパン、大麦、寝台、椅子）

王室経済による大麦支給（分配機能）

農業：大麦・玉ねぎ・キュウリ・羊・ナツメヤシ

運河建設への言及はシュメールの経済運営にとって重要